
鋼の錬金術師～三人の天才～

kein

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼の錬金術師〜三人の天才〜

【Nコード】

N3698C

【作者名】

kein

【あらすじ】

いろいろな所を旅していたシンジは、リオールで弟のエドワードとアルフォンスに再会する。この再会により、エドワード達の旅は過激になっていく。暑い所ではダブルス、寒い所ではブリッグズへ旅する三人。一体どんなことが巻き起こるのか！

第一話 眼帯の錬金術師

「……あそこが、砂漠の街 リオール か」

「そうだよ、それじゃあ気をつけてね、コーネロに目をつけられないようにね」

「案内ありがとう、エンヴィー」

「どつって事無いよ、シンジ」

黒いコート、黒い半袖シャツ、黒い長ズボンに身を包み右目に黒い眼帯をした銀色の長い髪の少年が黒一色という身に包み額に黒いリストバンドを着けた少年に礼を言う。

リストバンドの少年の名は エンヴィー ホムンクルスの一人である。

「……エドとアル、元気だろうか、司令部に言い訳しないといけないし」

そう言って、シンジはリオールに向かって歩いていった。

リオールに到着したシンジは、まず傍にある軽い食事や飲み物を出しているスタンドに行き、椅子に座った。

「いらつしゃい、ご注文は？」

「軽い食べ物と飲み物を」

「はいよ」

しばらくして、目の前に食事が置かれ、フォークを使って食事を進ませる。

『この地上に生ける神の子らよ。祈り信じよ。去れば救われん』
カウンターの真上だろうか、音声が流れている。

シンジはいつの間にか食事を終了させて見上げている。

「……ラジオで宗教放送か？」

カウンターにいる店主に訊く。

「おお、そうだよ、そう言えば、見かけない顔だね。旅行か？」

「ちょっとした弟たちを捜しているんだよ、結構有名になっているし」

苦笑いをしながら言うシンジ。

シンジの弟たちは一体誰だろう。

すると、横で。

「ごちそーさん、んじゃ行くか」

「うん」

金髪の少年と青銅色の鎧が席を立った時だった。

ごちっ、ガシャン!!

そんな音と共にラジオが落ちて粉々に砕けてしまった。

「あ」

「あ　　!!!!!!」

店主がカウンターを乗り出して青銅色の鎧に怒鳴る。

「ちょっとお!! 困るなお客さん、だいたいそんなカツコで歩いてるから……」

「悪い悪い、すぐ直すから」

すると、鎧がラジオを一カ所に集めて、地面に陣のようなものを書く。

「　　よし、それじゃ、いつきまーす!」

次の瞬間、陣から光が発してくる。

店主や店にいた客が目をつぶり、次に目を開けた時には、

「これでいいかな?」

金髪の少年が指をさした先には元通りのラジオがあった。

「……こりゃあ驚いた、あんた　奇跡の業　が使えるのかい!?!」

「はあ? 何だそりゃ」

奇跡の業　という言葉に呆れる金色の子。

「ボクたち、錬金術師ですよ」

「　　エルリック兄弟　って言いゃあ、結構名が通ってるんだけどね」
その言葉に店主と店の客たちが顔を見合わせる。

「エルリック・・・エルリック兄弟だと？ああ、訊いたことあるぞ！」

「兄の方がたしか、国家錬金術師の・・・」
他の客がそれを引き継ぐ。

「鋼の錬金術師 エドワード・エルリック！」

その言葉で目の前の金髪ではなく、鎧を取り囲む客の人達。

「いやあ、あんたが噂の天才錬金術師！」

「なるほど！こんな鎧を着てるから二つ名が 鋼 なのか！」
鎧の頭がぎしぎしと軋む音を立てて左右に動いた。

「あの・・・ボクじゃなくて」

それにより金色の少年を見る。

「へ？あっちのちっこいの？」

ブッチイ！！

「誰が豆つぶどチビか ツ！！！」

と、カウンターをひっくり返す。

少し冷静になって。

「ボクは、弟のアルフォンス・エルリックです」

「オレが！ 鋼の錬金術師 ！！エドワード・エルリック！！！」

「し・・・失礼いたしました・・・」

そしたら、シンジが立ち上がりエドとアルに顔を向ける。

「エドは相変わらずだな」

「なんだ・・・」

シンジの方を向くエドだったが、シンジの顔を見て呆然とする。

「アルも苦労してるな」

「・・・え？嘘」

アルもシンジの顔を見て啞然とする。

それを見て、してやったり、ニヤリと笑う。

「開眼の錬金術師 シンジ・イカリだ、よろしく」

紫色の目がエド達を見る。

「シンジ兄さん！？」

「シンジお兄ちゃん!？」
「エドとアルの叫び声が響いた。」

第二話 賢者の石？

シンジとエドとアルは、神殿の広場の外側に立っていた、しかも目の前には、人、人、人だかりがいつぱい。

その為、エドはトランクを立さして、その上に乗っかり、神殿の入り口を見ている。

そこには、ハゲツルクソジジイ神父（うわあ、とんでもねえ名前だ、事実だけど）が、舞い飛んでいた一輪の花を両手で包む。

すると、その手が光る。

「・・・やっぱり、錬金術だな」

「そうですね、シンジお兄ちゃん」

「・・・しかも、あのクソジジイ、錬金術の法則を無視してやがる」錬金術の法則。質量が一の物からは同じく一の物、水の性質からは同じく水属性のみの物しか錬成できない法則である。

それに、錬金術の基本は、等価交換。人が得ようとするならば、それと同等の代価を支払う必要があるという事だ。

そして、三人は声を潜め（潜めていても、群衆の声に掻き消されるのがオチである）呟く。

「これはやっぱり」

「うん」

「ああ」

三人は確信したように顔を見合わせ言い放つ。

「・・・賢者の石！」「」

賢者の石。哲学者の石、天上の石とも呼ばれ、古今東西の錬金術師が探し求めてきた幻の物体。

これを使う者は等価交換の原則から解放され、僅かな代価で莫大な錬成を行う事ができるようになる。

だが、シンジはふと思ひ、もう一度、ハゲ神父がつけている指輪を見る。

微かだが、僅かに錬成の威力が落ちているのである。

(・・・錬成能力が減少している？どういう事だ？)

だが、それ以上深く考える事ができなかった。

「シンジ兄さん！！早く早く！！！」

「え、ああ！！ちよつと待ってくれ！！！」

呼ぶ声が聞こえたので、振り返ると、エド達が一人の少女に付いて行ってる。それを見て、慌てて、後を追うシンジ。

聖堂に案内されたシンジ達を出迎えたのは、特徴的な服を着た男だった。

(ここまで案内をしてくれたのは、ロゼという名の少女である)

「ようこそ、神聖なる我らの教会へ」

(なあゝにが『神聖なる』だ、馬鹿馬鹿しい)

ケツ、と内心で毒を吐きながらも無表情を通すシンジ。

「教主様は忙しい身で、なかなか時間が取れないのですが、あなた方は運がいい」

そう言つて、薄笑いを浮かべる。

エドが言う。

「わるいね、なるべく長話しないようにするからさ」

「ええ。すぐに終わらせてしましましょう」

男が服の胸元に手を差し入れる。

「このように！！！」

銃声が聖堂を震わせ、鎧の頭が吹き飛ぶ。遅れて身体がやかましい音で倒れる。

その音の後に何処から湧いて出てきたのか、数人の信者がシンジとエドを押さえつけに掛かる。

「師兄！何をなさるのですか！？」

「ロゼ、この者達は教主様を陥れようとする邪教の者、つまりは、我らレト神の敵なのだ！！それ故に教主様からのご命令だ、さらば

！」

銃口がエドに向けられ、引き金を引こうとした。

「ふう〜ん、酷い神もいたもんだ」

その瞬間、男の手から拳銃がもぎ取られ、男の顎に強烈な拳が叩き込まれた。

それを合図にエドとシンジが両脇にいる信者に蹴りや拳を与える。

「ほい、アル」

と、シンジが拳銃で吹っ飛ばされた頭を拾って、アルに渡す。

「ありがとう、シンジお兄ちゃん」

それを受け取って、帽子を被る仕草をする。

「さて、神様の正体見たり、だな」

そう言って、床に転がっている信者を見下ろすエド。

「そんな！何かの間違いよ！！」

そんな口ゼを、冷たく見るシンジ。

「ここまでされても、信じるとは、お前、馬鹿としか言いようがないな、真実を見る勇氣があるのなら、黙って俺達について来い」

切って捨てるような言葉だったが、真実を見る為にはそう言う方法しかなかった。

第二話 賢者の石？（後書き）

やあああつと、二話目だ。

これからもドンドン更新して置いた方が良いな。
しかし、ハゲツルクソジイ神父とは（笑

第三話 合成獣

ギイイイッ

「・・・へっ、『いらっしやい』だとさ」

「馬鹿な奴だな」

そう言いながらも中へと入っていく三人。

中は、以外に広かった、結構天井が高い、さっきの聖堂に近い造りの部屋だ。

「神聖なる我が教会にようこそ、国家錬金術師殿が、何のご用ですか？」

教主コーネロの声が上の方から降ってくる。

（・・・『死をも恐れぬ軍団』どうせ人間は、死という恐怖からは逃れられない）

心の中でシンジが呟く。

「教義を受けに来たのかね？」

「ペテンハゲ教主の説法、聞いているヒマはねえんだよ」

ハゲという言葉にコーネロはヒクツと眉を引きつらせる。

「単刀直入に言っぜ。さっさとその石俺達の方によこせよ、このハゲ教主が」

シンジは思いつ切り毒を吐きながら言う。

「それに、それは賢者の石だろ？」

左手に付いている指輪を指さすエド。

コーネロは笑顔を絶やさずにいながらも、冷徹な表情へと変えていった。

「ふ・・・流石は国家錬金術師。すべてお見通しという訳か。ご名答！伝説の中だけの代物とさえ

よばれる幻の術法増幅器：我々錬金術師がこれを使えば僅かな代価で莫大な錬成を行える！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・さがしたぜエ！！」

エドの鋭い目が、賢者の石を捕らえる。ただ、シンジの表情は浮かない。

(やっぱり・・・力が減少している、このままだと・・・)

「ふん！なんだそのもの欲しそうな目は！？この石を使って何を望む？金か？栄誉か？」

「あんだこそペテンで教祖におさまって何を望む？金ならその石を使えばいくらでも手に入るだろ。」

「金ではないのだよ。いや、金は欲しいがそれは黙っていても私のフトコロに入ってくる。」

信者の寄付という形でな。むしろ私のためなら喜んで命も捨てようともおい柔順な信者こそが

必要だ。すばらしいぞお！！死をも恐れぬ最強の軍団だ！！準備は着々と進みつつある。

見ているがいい！あと数年の後に私はこの国を切り取りにかかると！！ははははは！！！！

「いや、そんな事はどーでもいい。」

「てめえの願望なんざ興味ねえな」

「どっつ！！？」

ぺいつ、と手を横に持っていき、そう言うエドと、興味なさそうに切って捨てるシンジ。

コーネロはショックを受ける。折角ここまで語ったのに、こうも簡単にあしらわれては腹が立つ。

「我が野望を『どーでもいい』の一言で片付けるなあ！！貴様は軍の人間だろうが！！」

(そんなに叫ぶと血圧上がるぞ、ジジイ)

「いやあ、ぶっちゃけて言うとき、国とか軍とか知ったこっちゃーないんだよねオレは。それじゃ、とつとと賢者の石をよこせ、そうすればあんだのペテンは黙っとしてやる」

「はっ！！この私に交換条件とは・・・貴様達の様なよそ者の話など信者どもが信じるものか！

奴らはこの私に心酔しておる！忠実な僕だ！貴様達がいくら騒ぎ立てても奴らは耳もかさん！！

そうさ！馬鹿信者どもはこの私に騙されきつておるのだからなあ！ははははは！！」

そう勝ち誇ったように笑いながら言うコーネロに、エドは軽く拍手を送る。

「いやー、さすが教主様！いい話聴かせてもらったわ。確かに信者はオレ達の言葉にや耳も貸さないだろう。けど！」

アルが、バチン、と鎧の留め金を外した。空洞のアルの中に入っていたのは・・・

「ロゼの言葉には、誰もが耳を貸すだろうよ」

ロゼだった。そう、ロゼは今までのコーネロの言葉を全て聞いていたのだ。

「！？ロゼ！？いったい何がどういう・・・」

「教主様！！今おっしゃった事は本当ですか！？私達を騙していらつしやったのですか！？

奇跡の業は、神の力は私の願いを叶えてはくれないのですか！？あの人を甦らせてはくれないのですか！？」

もはや叫び声に近い、ロゼの言葉。そんな言葉に、コーネロは思わず声を詰まらせる。

だがコーネロは、声を絞り出すようにロゼに話し掛ける。

「ふ・・・確かに神の代理人というのは嘘だ・・・だがな、この石があれば今まで数多の錬金術師

が挑み、失敗してきた生体の錬成も・・・お前の恋人を甦らせることも可能かもしれんぞ！！」

「ロゼ、聞いちゃだめだ！」

「ロゼ、いい子だからこちらにおいで。」

「行ったら戻れなくなるぞ！」

「さあどうした？お前は教団側の人間だ。」

ロゼの心の中で繰り広げられる、葛藤。そして、聞こえてくる悪魔

の声。

「お前の願いを叶えられるのは私だけだ、そうだろう？最愛の恋人を思い出せ、さあ！！」

ロゼは3人から離れ、コーネロの方へと歩いて行った。

ロゼの葛藤が、終わった。聞き入れてしまったのだ、悪魔の声を。

「3人ともごめんなさい。それでも私にはこれしか・・・これにすがることができるのよ。」

「いい子だ・・・本当に・・・さて、では我が教団の将来を脅かす異教徒は速やかに粛清するでしょう。」

凶悪な笑みを浮かべたコーネロは何かのレバーを下げた。

何やら錆び付いたものが開く音がして、何かがバシンと床を叩いた。「この賢者の石というのはまったく大した代物でな、こういう物も作れるのだよ。合成獣^{キメラ}を見るのは初めてかね？ん？」

それは、ライオンとも、爬虫類とも言い難いもの。それはエド達の後ろに現れ、

今にも襲いかかりそうだ。アルがヒュー、と口笛を鳴らす。「悪趣味だな」と呆れて言うシンジ。

「これじゃあ、丸腰で戦うのはきついな」

そう言つて、シンジはポケットから数個の鉄を手に取り、それを両手に包み錬成をする。

鉄が、連鎖するようにくつつき、長くなる。

錬成し終わった後には、一本の刀がシンジの手にあった。

「む、貴様も錬金術師か！！なら、まず貴様から消してくれるわ！！」

合成獣がシンジに襲いかかる。だが、

「消えるのは、貴様の合成獣^{キメラ}だ」

シンジは合成獣^{キメラ}の腹の下に潜り込んでいて、刀を構えていた。そして、

「一刀・・・両断！！」

ヒュン、ザバンツ！！ブシャアアアア！！ベチヨツ！！ベチヨツ！！

「うつ！」

合成獣^{キメラ}を腹から両断し、そこから、血が勢い良く吹き出し床に転がる合成獣^{キメラ}の死体。

ロゼは、それを見て口を押さえる。(しばらく、肉系は駄目ですね)

「なつ、あの合成獣^{キメラ}を、いとも簡単に！」

「所詮、貴様は三流としか言いようがねえよ」

そう言った後に、シンジは刀を振って血を拭う。

そして、綺麗になった刀を三流教主に向ける。

「降りて来いよ、テメエなんざ、一分以内に片付けてやるぜ」

と、挑発をするシンジ。

「くっ……ならば、私が直接、神の元へ送り届けてやろう
！！」

そう言つてコーネロは石の力を使い、杖から銃を錬成した。

その銃をエド達へ向け、引き金を引く。凄まじく発砲音が響く。

辺りからは砂埃が上がり、エド達の姿は見えない。

「はははははははは、……!?!」

「いやあ、俺達つて神様に嫌われてるだろうからさ、行つても追い

返されると思つぜ!!」

エドとシンジの前には、床から錬成された壁。もちろん弾はエドと

シンジには当たらず。

今度はアルとロゼの方へ発砲する。

アルはロゼを抱き抱え、コーネロに背を向けて走る。弾は虚しくも

跳弾する。

「きゃーっ！っ！っ！」

「あただだだ」

「アル、いったん出るぞ！」

「バカめ!!! 出口はこっちで操作せねば開かぬようになっておる!
！」

「はんっ!!! 錬金術師にはそんな常識、通用しない!!!」

シンジはそう言つて、両手をパンと合わせ壁に手を当てる。目映い

錬成反応が起き、壁に大きな扉が現れた。そして突き破るように勢いよく開ける。

「んなあーっ!!!!??」

「出口がなけりゃあ、作るのがモットー!!」

そう言つて、ピューーと逃げる。

そうこうしている間にも、警備の男達は追ってくる。そして、エド達の行く手を阻む。

「止まれ、その者!!」

「ほら、ボウズ。丸腰でこの人数相手にする気かい? ケガしないうちにおとなしく捕まり・・・」

「そつちこそ、怪我したくないのなら、とつとと、そこをどけ!」
シンジが制止の声を聞かずに瞬時に男達の懐に潜り込み、峰打ちを当て、気絶させる。

その横では、エドが機械鎧オートメイルを大きな刃物に錬成して、凶悪な笑みで男達をなぎ倒す。

アルも「はい邪魔ー」と言つて男を蹴り倒す。

「お?この部屋は・・・」

「放送室よ。教主様がラジオで教義をする・・・」

「ほほーう。」

(あ、なんかいやらしい事考えてる・・・)

「小僧共オオーっ!!もう逃がさんぞ!!」

エドとシンジのいる放送室まで、やっと辿り着いたコーネロ。かなり探し回ったのか、ゼエゼエと肩で息をしている。

「もう諦めたら? あんたの嘘もどうせ、すぐ街中に広がるぜ?」

「それより、そんなに走つて、その後にかくとかなり血圧上がるぞ、もう、あんたは年なんだからよ」

「余計なお世話じゃあ!! フン、教会内は私の直属の部下だし、バ

力信者どもの情報操作などわけもないわ！」

「やれやれ、あんたを信じてる人達もかわいそうな事だ。」

「信者どもなぞ戦のための駒だ！ただの駒に同情など不要！！それになあ、神のために信じ幸福のうちに死ねるなら奴らも本望だろうよ！錬金術と奇跡の業の区別もつかん信者を量産して駒はいくらでも補給可能！これしきの事で我が野望を阻止できるとでも思ったか！！！」

そう言つて高らかに笑うコーネロ。しかし、シンジとエドはニヤリと笑つ。

「くっ・・・ぶははははは！！！」

膝を叩きながら大声で笑うエド。右手で顔を覆い、クックククと笑うシンジ。

一方、コーネロは何が何だか分からないと言つた様子だ。

「だあーから、あんたは三流だつーんだよ。このハゲ！」

「小僧！！まだ言うか！！！」

「これ」「なーんだ」

エドが見せたのは、ONになっておるマイクのスイッチ。コーネロの足元にはマイクがある。

つまり、今までの会話は街中に流れていたのだ。ラジオをつけている人はもちろん、

アルが教会の鐘を使ってスピーカーを錬成したので、外にいた人にもバツチリ聞こえていた。

「ま、まさか・・・貴様らあー！ツ！！いつからだ！！そのスイッチ、いつから・・・」

「最初からvもー全部、だだもれvv」

「なつなつなつ・・・なんて事を~~~~つっ・・・このガキ共・・・ぶち殺」

「遅エよ！！！」

先程と同じく、銃を錬成し発砲しようとするコーネロに、そんな暇を与えないエド。

エドの鋼の甲剣が、コーネロの錬成した銃を真つ二つにする。

「あなたとは格が違うんだよ。」

「私は・・・私は諦めんぞ・・・この石がある限り、何度でも奇跡の業で・・・」

「ちっ・・・」

またもや錬成しようとするコーネロに、エドは斬りかかろうとするが、ばちい、と言う音と共にコーネロの手から血が噴き出す。コーネロの手は、

機械と肉が混ざり合った、もはや人間の手とは言えないものとなっていた。

「・・・つぎやああああ！！！！う・・・腕っ・・・私の腕が！！」

「な・・・なんで・・・いつたい・・・。」

「・・・やっぱりな」

コーネロの腕を見て、確信したシンジ。

「や、やっぱりって？」

「・・・あの石は、未完成品なんだ。だからリバウンドが起こった、とんだ粗悪品を掴まされたな、そして、力のなくなった石は、砂になる」

シンジの言う通り、石はひびが入り砂になった。

「そ、そんな」

エドは魂が抜けたように落ち込む。

シンジは、コーネロに近付いて、

「ギヤーギヤー五月蠅いんだよ、ちったあ黙ってる！！」

バキッ！！

拳を握り締め、強烈な右ストレートをコーネロに叩き込む。

その一撃で、気絶するコーネロ。

「ハンパ物？」

「ああ、とんだムダ足だ。やっとお前の身体を元に戻せるかと思っ

たのにな……。」

「ボクより兄さんの方が先だろ。機械鎧は色々大変なんだからさあ。」

「しょうがない。また次さがすか……。」

あーあ、とため息をつき、エドとアルは立ち上がる。

が、横から、ロゼの弱々しい声が聞こえてくる。エド達は一旦止まる。

「そんな……嘘よ……。だって……生き返るって言ったもの……。」

「諦めな、ロゼ。元から——」

「何て事してくれたのよ……これからあたしは！何に縋って生きていけばいいのよ！教えてよ！ねえ！！」

そう言っつて、泣きながらエド達を責め立てるロゼ。

そんなロゼにエドが口を開き、冷たく言い放つ。

「そんな事自分で考える。立っつて歩け、前へ進め。あんたには立派な足がついてるじゃないか。」

そう言っつてロゼの横を通り過ぎ、シンジ、アルと共に歩き出した。

ロゼは、エドの言っつた言葉を思い返しながら、空を見上げていた。

「『立っつて歩け、前へ進め』か、エドが他人に言っつセリフじゃないな」

「……」

妙に静かな街の通り道で、シンジが先程の言葉を言っつて、皮肉を言い立ち止まる。

その言葉に、エドは顔を俯かせる。

アルは顔を背ける。

「……決めたからには、必ず最後まで突き通せ。俺はお前達二人を責めるような事はしない、行くぞ」

そう言っつて、再び歩き出す。

エドモアルもシンジのあとに続く。
汽車に乗り次の街へと向かう。
三人の旅。

第三話 合成獣（後書き）

シンジの錬金術！！いやあ、やっと出せたよお。

けど、やっぱり・・・強すぎ？（見りゃわかるだろ

まあ、良いか（良いのか？

さて、お次はユースウェル炭鉱編！！

今度は、オリキャラも出しますのでよろしくお願いします！！

第四話 空から降ってきた者

「・・・だーれも乗ってないね」

「噂には聞いていたがこれほどとは・・・」

「大体、こんな所には観光なんて無いだろ？」

貸し切り状態の列車の中で、シンジ達が呟く。

駅を出発して東の終わりの街ユースウェル炭鉱に向かう車内でのんびりとくつろいで順調に列車は目的地に近付いていた

ガタン・・・・・・・・キイイイイイ~~~~~

「うわっ！！何だ何だ!？」

「危ないっ兄さんっ!」

「緊急停車?」

突然、列車が急に止まりその衝撃で前にいるシンジに飛び込んでしまふ所だったがアルがしっかりとガードした。

「・・・様子がおかしい、エド、アル、機関室に行くぞ」

「え?あ、うん!」

「お、おう!」

シンジとエドとアルは機関室に向かって車内を駆け出していった。

「な・・・・・・・・何なんだよ・・・これ」

「・・・・・・・・おつきい穴があいてるね、シンジお兄ちゃん」

「・・・・・・・・ああ」

三人が呆然とするのも無理もない。

列車機関室にたどり着いた三人が目にしたのは

列車の数メートル先にぼつかりと大穴があいていたのである。

「なあ、一体何が起きたんだ？」

シンジが呆然としている機関士に尋ねる。

「いきなり前方が光ったと思ったたら穴があいていたのが見えたんで急ブレーキを掛けたんだが……これじゃあ列車は動かせられんな……」

「（光？）そうか、おじさん、俺達は降りてちよつと調べてくるよ」

「坊主……大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、とにかく降りて調べてくる」

そう言つて、三人は汽車を降りていった。

「だが、どうやってこんな大きな穴が？」

「……爆弾……にしては、爆風が来ないのはおかしい」

「……もしかして、錬金術師？」

「……御伽話に出てくる魔術師だったりして（ボソ）」

「シンジ兄さん？」

「いや、なんでも……」

「きやあああああ……！！！」

突然、話している三人の頭上から声が聞こえた

「な、なに？」

「なんだあ？げっ！！空から人が降ってくる！！！」

「何を……マジかよ」

叫び声と共に空から降ってきた人物は見事アルの腕の中に着地した

「アル、エド、大丈夫か？」

「あ、ああ、何とか」

「あ、うん、僕もこの人も無事だよ」

「・・・あの叫び声の人物がこのお姉さんか？」

「そう、みたい」

三人はこの女性を見て少々考え込む。

腰まである長い黒髪と透き通るような白い肌。

歳の頃は二十代前半ぐらい、とにかくシンジ達よりは年上に見えた。

(ちなみにシンジは18歳)

落下のショックからか、どうやら気を失っているが、目を覚ませばかなりの美人であるのは間違いないと断言できるほど整った容姿だった。

着ている服も異国風だが、あまり違和感はない。

その上からすっぽりと、ローブを羽織っていた。

シンジはこの女性が降ってきた空を見上げてぼつりと呟く。

「何でこのお姉さんが、空から降ってくるのか疑問でなんだが、そもそも何処から」

「何処からだろう」

「……………う……………ん、ま、ここで考えてもしようがないと思

うぜ。シンジ兄さん」

「・・・だな、エドとアルはそのお姉さんを連れて戻っていてくれ、俺はこれを直してから戻るから」

「うん」

「おう」

エドとアルはシンジの言葉に頷いて、先に列車の中に戻った。

「さあて、とつとと済ませるか」

そう言っつて、両手を合わせ地面に手をつけると金色の閃光が迸った。

「う・・・ん・・・」

列車の座席に寝かされていた女性がうつすらと目を開ける。

それに気付いたエドがシンジに声を掛ける。

「お、シンジ兄さん、気が付いたみたいだぜ」

「そうか」

そう言っつて、手に持っていた本をパタンと閉じて隣に置く。

女性は、顔をシンジ達に向ける。

「・・・えつと・・・あの、どちら様ですか？」

女性は状況が分かっていないのか、開口一番三人を見てそう言っつた。

「え？ええと、僕はアルフォンスといいます、隣にいるのが」

「兄のエドワードだ、それで、この人が俺達の兄貴分、シンジ兄さんだ」

「・・・」

シンジは彼女の顔を見て考え込んでいる。

鎧姿のアルとエドがそう答えると女性はニッコリと微笑んでそろそろと体を起こし丁寧に頭を下げた。

「これは丁寧ありがとうございますと御座います。私はメリッサ・ランドールと申します」

そこまで答えてからきよろきよろと周りを見渡し首を傾げ透き通る

ら当たりだな」

シンジの横でエドとアルがヒソヒソと話していた。

「なあ、アル。魔術師って御伽話に出てくるあれか？」

「……僕に聞かないでよ」

それを横目で見て、深い溜息をつくシンジ。

それを同情の目で見るとメリッサ。

しばらくして

「コホン、それじゃあ、魔術師はいなくて錬金術師がいるのね」

「ああ、錬金術の分野なら俺らの得意分野だしな、それと、東の方では錬丹術と言ってるようだぜ」

「『錬丹術？』」

メリッサとエドとアルが声を揃えて言う。

少し苦笑い、少しだけ説明をする。

「錬丹術は、医学分野に秀でた技術なんだ」

そうこうしているうちに、汽車がユースウェル炭鉱の駅に到着した。

「なんか……炭鉱って言うともう少し活気あるもんだと思っただけど……」

エドが周りを見渡して、そう呟く。

「皆さんお疲れっばい……」

アルもエドと同じ感想なのだろう街の人達を見てそう呟く。

「……(多分違うな)」

シンジは難しい顔で街の人達を見た。

「ん……元気ないですね」

メリッサも同意見らしい。

ゴンー！

突然威勢のいい音が響いた。

見れば少年の運んでいた木材とエドの頭がぶつかった音らしい。

「おっと、ごめんよ」

「いてーな、この・・・」

「おー！何？観光？何処から来たの？メシは？宿は決まってる？」

「あ、いや、ちよつと・・・」

少年は矢継ぎ早にエドに質問をしている。

エドはそんな少年の勢いに付いていけず答えもそぞろだ。

アルとメリッサは二人の遣り取りにただ呆然と見ていた。

シンジはこうなる事を最初から知っていた為か、とある方向を見ている。

そのうち少年が工事現場にいた男に話し掛けた。

「親父！客だ！」

「人の話聞けよ！」

「あー？なんだってカヤル」

「客！金ヅル！」

「金ヅルってなんだよ！」

付いていけないスピードで、勝手に話が進んでいく。

「あの、私達って、金ヅルなんですか？」

「・・・そうなの？」

「・・・みただな」

メリッサとシンジとアルがボソボソと話し込んでいるうちに気付けばその親子の店に行く事になってしまった。

店の中では炭鉱で働く男達の憩いの場になっているらしく主人は皆から『親方』と呼ばれている。

四人が店にはいると皆気兼ねなく陽気に話し掛けてくる。

「よ、姉さん美人だね兄弟で旅行かい？」

「は、はあ……」

「ここには何しに来たんだい？」

「あの……ええつと……」

気が付けばメリツサは男達にぐるりと囲まれていた。

「悪いが、俺の連れだそっちに引き込むのは勘弁願いたい」

シンジがメリツサの手を引いてエドとアルと共にあいているテーブルについた。

「ありがとう、シンジく……」

「俺の事はシンジ、彼らもエドとアルと呼んでくれ、良いよな」

「うん!!」

「良いぜ」

「じゃあ、私の事もリイーって呼んでくれるかしら」

「分かった。それから、リイーは絶対、俺達から離れるな、この世界の知識は何もないんだろうろろすると、かえって危険だ」

「ありがとう……」

メリツサがシンジに礼を言うと、シンジは目を瞑って口許を緩ませた。

それを側から見えていたエドとアルは、

(青春だね兄さん)

(ああ、やっとシンジ兄さんにも春が来たからな)とこそこそと話していた。

「えーと、一泊二食の四人分ね」

店の奥さんがシンジ達に声を掛ける。

「あ、でも私……」

そう言いかけたメリツサをシンジは手で制した。

「いくらで？」

「高えぞ？」

にやりと店の主人である親方が不適に微笑んだ。

「ご心配なく、結構持つてるから」

間に入ってくるエドにキツパリという親方。

「40万！」

どがー

エドが椅子ごとひっくり返り、シンジが乾いた笑いをする。

「ボツタクリも良いとこじゃねえかよー！」

「だから言っただろ、『高い』って」

「はいはい、ケンカは後回し、俺が40万払うよ」

「シンジ兄さん！？」

「おお、結構な額じゃねえか、毎度あり兄ちゃん」

シンジが懐から財布を取りだし、中から1万セنزを40枚取り出して、この店の親方に渡す。

「ええ、シンジお兄ちゃんって常識を斜め上に限りなくずらしてるよ。絶対」

「へえ、シンジって、お金持ちなんだ」

と、少々ずれた会話をする二人。

「エド、お前金が足りなかったら、石ころを金に錬成しよう、何て考えしなかったか？」

「（ギクツ）や、やだなあ、そんな訳あるはず無いじゃないですかあ、シンジ兄さん、はははは」

（絶対、考えてたな）

ふうつと溜息をつくシンジ、ふと横を見ると。

カヤルが、シンジの方を見ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・聞かれたか」

シンジの呟きもカヤルの大声に掻き消された。

「親父！！この兄ちゃん錬金術師だ！！」

その後壊れたツルハシを錬金術で直したシンジを見たメリッサは「すごい」と、大袈裟なくらいシンジに言っていた。

「いやあ、国家錬金術師は悪い人間ばかりかと思っただが、あんた達は違うみたいだな、すまん」

「……いや、別にあんたが謝らなくても良い、もうすぐ、ヨキは軍を追放され、経営者を止めさせられるぞ」
差し出された食事を食べながら、そう言うシンジ。

「どういう……」

「どけどけ!!」

親方の声を遮るように大きな声が扉の向こうから聞こえた。

そこには軍人が三人いた。

(やっと、お出ましか)

シンジが心の中でそう呟き、唇をハンカチで拭く。

「相変わらず汚い店だな、ホーリング」

ちよびひげの男が毒を吐く。

「……これは中尉殿、こんなむさ苦しい所へようこそ」

「あいさつはいい、このところ税金を滞納しておるようだな、おまえの所に限らず、この街全体に言える事だが……」

「すみませんね、どうにも稼ぎが少ないもんで」

その遣り取りを見ていた、メリッサがシンジに小さい声で言う。

「……私こう言うの嫌い」

「これを好きになる人間がいたら面白い物だな」

さて、とシンジが腕を組んで立ち上がる。

それに気付いて店の親方に聞く。

「誰だ？此奴は」

「この方は、お客様ですよ、最上級の」

その言葉を鼻で笑うヨキ。

「ふん、誰だか知らんが怪我したくなかったら、そこから立ち去れ」

「……ほう、お前は相手を誰だったか忘れてるようだな」

そう言って、ゆっくりと振り向く。

その瞳は、少し怒っていた。

その顔を見て、青ざめたヨキ。

「お、おま……あなたは(真っ青)」

「……さっさと炭鉱の権利書をこの親方に引き渡しやがれ、小物

が

シンジの言葉に怒ったのは、何も知らない用心棒の二人だった。

「テメエ、いい気になるなよ！」

「ヨキ中尉の暴言を言うんじゃないやねえ!!！」

と、腰にあつたサーベルを抜いて、構えている。

シンジは、左腰にある刀を鞘から抜き、肩に乗せる。(というか、

何時の間に!?)

「ま、まて!!！」

「調子に乗るんじゃないやねえええ!!！」

用心棒の一人が無策に突っ込む。

振り下ろされたサーベルを横に避け、左脚で用心棒の顔に蹴りを与え店の外に吹っ飛ばす。

用心棒の一人は、これで歯が数本折れた。

「なっ!!！てめえええええ!!！」

「雑魚が、黙ってる」

横に振り抜いてきたサーベルを刀で受け止める。

だが、密度は刀が上なのでサーベルは折れてしまう。

「んなっ!!！」

最後の用心棒を殴り飛ばす。

しばらく流動食しか食べられなくなった、哀れ用心棒。

戦闘を終了した後、刀を鞘に戻す。

「さっさと、炭鉱の権利書を引き渡せ、さもなきや。地獄の折檻フルコースDプランを使用するぞ」

「申し訳御座いません、すぐに」

そう言つて、用心棒に経営権を持ってこさせ、名義を変え権利書をシンジに引き渡した。

「それから、大総統キング・ブラッドレイからの命令書がある。この命令は絶対だ。良いな」

「は、はい」

「大総統キング・ブラッドレイの命により、元炭鉱の経営者ヨキ

を軍から永久追放をする』以上だ」
つまり

「……首つてこと？」

「大当たり、ヨキはこれで軍にはもう、所属する事はできない」
そう言つて、ホーリングに権利書を渡す。

「これで、炭鉱の経営権はあんたの物だ。好きに使いな」

ヨキはすでにこの店から去っている。

一瞬、静かになったが、

「うおおおおおおおおおおおおおお……！！！！！！」

「よっしやあー！！！！！！」

「酒持つてこい酒！！！！！！」

と、すぐにどんちゃん騒ぎになった。

「これにて、一件落着」

と、懐から扇子を取り出して扇ぐシンジ。

「これで、また活気が溢れるんだね、兄さん、リィー、シンジお兄ちゃん」

「そうだな」

嬉しく言うアルにエドも笑顔で言う。

メリッサは蔓延の笑みを浮かべる。

で、結局

「またお腹出して寝て！だらしのないなあもう！」

「もう食べられない……」

と、苦労するアル。

シンジは壁により掛かって眠っていて、その隣にメリッサが寄りかかって眠っている。

第五話 恐怖のトラウマ（最初だけ

「エドってば、シンジの膝の上でよく眠ってるわね」

メリッサは、シンジの膝を丁度枕代わりに寝ているエドの顔を覗き込んでそう呟く。

「シンジお兄ちゃん、兄さんを乗せて重くない？」

「平気だ、昨日は昨日で徹夜に付き合わせたからな」

「は、ははは、無理はしないようにって言って置いたんだけど」

「これを見てれば無理よね」

「エドが目を覚ましたらビックリするだろうな」

シンジ達が乗った特急列車が過激派グループに乗っ取られてから30分あまり車内が緊迫した空気の中エドは目の覚める気配もなくぐっすりと寝ていた。

「「御免なさい！！御免なさい！！御免なさい！！御免なさい！！」
もうトレインジャック何てしませんから！！だから！！地獄の折檻フルコースはーーーー！！」

犯人グループの二人がいきなり入って来て、いきなり土下座を繰り返しながら謝っている、顔をグシャグシャに泣きはらしながら。

「・・・知り合い？」

メリッサがシンジに聞く。

「ああ、前にこいつらと一戦交えて、地獄の折檻フルコースAプランを執行した、無論汽車の中で」

「どうやら、彼らの恐怖の対象はシンジみたいだ。」

「というより、地獄の折檻とは一体。」

「しかも、フルコース……怖くなりそうな名前だな。」

「で？後10人いるのか？」

「は、はい！！後、俺らのボスはバルドです！！」

「ビビリながらボスの名を挙げる。」

「可哀相に、過去のトラウマを抱え、さらにはそのトラウマが目の前にいるのだから。」

「……よっしゃ、バルド達にこう言え『とつと人質を解放して投降しろ、さもなきゃ、地獄の折檻フルコースDプランを執行すんぞ』って」

「は、はい！！ただちにいつてきます！！」

「そう言って、一等車両に向かう犯人グループの二人。」

「そこで、メリッサがアルに聞く。」

「……ねえ、シンジって、ある意味最強？」

「……そうとしか言いようがないんだもん」

その後、列車は何事もなくイーストシティーに到着した。

「や、鋼の」

「ロイ・マスタング大佐がにこやかに出迎えてきた。」

「あれ、大佐こんにちは」

「よう、マスタング」

「気付いたシンジとアルが挨拶をする。」

「エドはあらか様に嫌そうな顔をした。」

「ねえ・・・シンジ、アル？あの方どなた？エドが嫌そうな顔をしているのは何故？」

シンジとアルの隣に隠れるようにいたメリッサは不思議そうに尋ねる。

「ああ、彼奴はロイ・マスタング。焔の錬金術師でエド達がいつもお世話をして貰っている人だ」

「ふーん」

「ただどなあ、綺麗な女性を見つけると直ぐさまナンパをし掛けるんだよ。それに彼奴の手帳は、全部女性の名前で記入されてるし」
シンジの後の言葉に啞然とするアルとメリッサ。

すると、

「シンジ大佐、お久しぶりです」

「ああ、ホークアイ中尉、久しぶり」

「ホークアイ中尉、こんにちは」

「アルフォンス君もこんにちは」

ロイの副官リザ・ホークアイ中尉が挨拶をしてきた。

ちなみに、リザがシンジの事を大佐と呼んでいるのは、シンジが「まかす為に嘘の階級を言った為」。

「この方は？」

「マスタングの副官、リザ・ホークアイ。射撃の名手だ、それと、こっちはメリッサ・ランドール。訳有って、俺達と行動を共にしている」

「初めましてメリッサさん、私はリザ・ホークアイ、よろしく」

「初めましてホークアイさん、メリッサ・ランドールと言います、

こちらこそ」

「リザで良いわ」

「それじゃ、私の事はリーって呼んでください」

いつの間にか、これだけで仲良くなった二人だった。

「そう言えばさ、マスタングはどうしてここに？」

「妹さんを迎えに」

リザの言葉に首を傾げるシンジ。

「マスタングに妹なんか居たのか？」

「・・・あ、そうか、シンジお兄ちゃんは知らなかったんだっけ」
アルが、ふと思いついたように言う。

それにまたも首を傾げるシンジ。

「リサ・マスタング、兄さんと同じ15歳で『銀眼の錬金術師』って呼ばれてるよ」

「国家錬金術師だったのか。で？同じ列車に乗っていたと？」

「そうよ」

リザが頷くと深い溜息をついたシンジ。

「ああ・・・休日が欲しい」

「シンジお兄ちゃん（ホロリ）」

「シンジ・・・苦労が耐えないわね（ホロリ）」

同情するアルとメリッサ。

未だ、エドとロイは口喧嘩を続けている。

そこに

「エド、ロイ兄さん、いい加減止めなさいよ」

物静かな声がエド達の方から聞こえた。

シンジ達がそっちの方を向くと銀色の髪長い少女が居た。

エド達はその少女に向かって、

「邪魔しないでくれ!!」

と言い、ケンカを再開した。

その少女はと言うと、

プッチン

パンー!!バシイイ!!ジャキン!!

「・・・いい加減にしなさいって言ってるでしょ?」

「・・・はい」

切れて、錬金術を使い敷石から剣を二つ錬成し、二人の首に突きつけた。

それを遠目で見ていた、シンジ達は、

「・・・相変わらず、自分の妹には勝てないのですね。大佐」

「て言うか、兄さんもりサを困らせないでって言ったのに」

「・・・あの子が、リサ・マスタングか」

「ふーん、大佐さんと違って、可愛い子ね」

と、傍観者を決め込んでいた。

ふと、思い出したシンジがリザに聞く。

「そう言えば、『綴命の錬金術師』シヨウ・タッカーは、資格剥奪に刑務所送りにしたか？」

「ええ、それと、ニーナ・タッカーと飼い犬のアレキササンダーは、ヒューズ中佐に」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あの親バカヒューズにか？」

マース・ヒューズの名を聞いて、疲れた表情になりながらリザに聞いた。

「ええ」

「はあ、あの親バカが二倍になってくるぞ、ったく少しはこつちの都合も考えやがれ」

と、頭を押さえてブツブツと暗い表情で言う。

そんなシンジの肩をぽんと叩くりザ。

まだまだ先は長い、頑張れシンジ。

(頑張れられるかー！ー！byシンジ)

第五話 恐怖のトラウマ（最初だけ（後書き）

は、はは、ははは、

ぜ、全然トラウマになってない。

ぶ、文才能力ゼロだな。

次は、シンジの過去を書きたいと思います。

・・・できるかな？

第六話 シンジの過去

イーストシティー 宿屋

シンジは一人、ベッドの上に寝つ転がって本を読んでいる。

エドとアルは図書館、メリッサはリサと一緒にシヨッピングに出かけている。

つまり、シンジは留守番という訳だ。

「……暇だな」

本をパタンと閉じて、枕元に置いて天井を見上げる。

そして、ふうーつと息を吐く。

（あれから、12年経ったな。あの『事件』以来、碌に帰ってないな）

目を瞑って、あこのころの記憶を辿る。

1902年 シンジ6歳

「……ちゃん、シンちゃん、お願いがあるんだけど」

「お願いですか？」

椅子に座っている、銀色の長い髪に右目に眼帯をしている、小さな少年にその女性はお願いをしている。

女性は、壊れてしまった皿を見せる。

「さつき、手を滑らせてお皿を割っちゃったの、だから」

「分かりました、錬金術で直せば良いんですね」

少年は頷くと、その女性から真つ二つに割れた皿を下に置いて、両手を合わせる。

パン！バシイ！！

合わせた両手を割れた皿に添えて錬成する。

そして、光が収まった後、そこには割れていたはずの皿が元に戻っ

ていた。

それを手にとってお礼を言う。そう、彼こそ、小さい時のシンジなのだ。

「ありがとうシンちゃん、やっぱりシンちゃんの錬金術は凄いわね」

「でも、錬金術は万能じゃないんですよ、前にも言いましたけど」
すると、シンジは壁に掛けていた刀を手に持って、玄関に行く。

「それじゃあ、ちょっと遊んできます」

「はい、いつてらしゃい」

その言葉を聞いて、シンジは駆け出していった。

見送った後、その女性は、いつの間にか椅子に座っている黒一色の格好をしている、エンヴィーに話している。

「・・・元気になってくれて良かったわ」

「ほんとほんと、シンジは笑顔が一番、それじゃあ、僕も見回りに行って来るよ」

「ええ、行ってらっしゃいエンヴィー」

エンヴィーは、玄関とは違う、窓から外へ出た。

「あはははは！！面白かった！！」

「俺も俺も！！」

「そろそろ、帰っていった方が良くんじゃない？シンジ」

街の友達と遊んでいるシンジに一言声を掛ける、友人A。

「うわ！もうそんなに経ってんだ、それじゃあ、またね！！」

「バイバイ！！」

「また来いよ！！シンジ！！」

友人に手を振って、大急ぎで家に帰るシンジ。

この後待っている悲劇がある事も知らないで。

「おばさん、エンヴィー！ただいま！」

いつものようにただいまを言ったら、お帰りという返事が返ってくるはずなのだが。

何も返つてこない、しかも、不思議な事に明かりがついていない。不審に思ったシンジが、刀を鞘から抜いて右手に持ち靴を脱いで、二人を捜すシンジ。

「おばさん？エンヴィー？どこ？」

他の部屋を探しても居なかつたので、キッチンに行く。そしたら、

「……………え？……………おば……………さん？……………
・エンヴィー？」

そこには、腹部から血を流して倒れているおばと全身ズタズタに切られているエンヴィーが倒れていた。

「おばさん！！エンヴィー！！しっかりして！！」

シンジが慌てて駆け寄り、おばの体を起こす。

「おばさん！！おばさん！！！！」

それから、二日後出血多量でおばが死亡した。

エンヴィーは、致命傷には至らなかつた為、その翌日に退院できた。

シンジはおばの墓石のまえに胡座をかいて座っている。
そこに

「……………シンジ」

「……………退院できたんだ」

エンヴィーの声に静かに言うシンジ。

「……………おばさんがね、『シンちゃんは、いろんな人を守る為に産まれてきたのかも知れないわね』ってね、その時にそうかも知れないって、思った事があつたんだ」

「シンジ……………」

「……………今はおばさんは居ない。けど、いつまでも引きずる訳には行かない。だから、僕は、国家錬金術師になりたい」

その言葉に、目を見開きビクリするエンヴィー。

シンジは、立ち上がり、傍にある黒いコートを着る。

刀を、鞘から引き抜き、墓石の隣に突き刺す。

そして、離れる。

「……ここを離れて、リゼンブルに住居を変えるよ」

「……分かった、シンジの決めた事には口を出さないよ」

そして、この日を境にシンジとエンヴィーは引越した。

リゼンブルに引越して5ヶ月。

「シンジ、客だよ」

エンヴィーがキッチンに戻って来て、後ろを親指でさす。

そこには、

「……キ、キング・ブラッドレイ大總統？」

「固くしなくても良い、ただ、君に話がしたくてね」

と、近くにある椅子に座る、シンジはエンヴィーを見る。

彼は、黙って頷く。

「……話とは？」

「何故、君のような子供が国家資格を受けたいのか理由を聞きたくてね」

その目は鋭かった。

「……誓ったんですよ、おばさんの墓前で」

「……確か、殺されたんだったね」

「……はい。僕は、復讐なんて考えませんよ、例え、復讐を果たしても、その後に残るのはむなし感情だけです。だから・

……」

「それ以上は言わなくて良い、分かった。一年後。中央にエンヴィ

セントラル

ーと共に来るんだ。良いね」

その大總統の言葉に目を向けるシンジ。

「よろしいのですか？」

「勿論だとも。それでは、期待しているよ、眼帯の錬金術師君」
そう言っつて、シンジの家を後にした。
「……良かったね、シンジ」
「うん！」
二人はニツコリと笑った。

1年後 シンジ7歳

「お世話になりました」
「御免なさい、僕らの勝手な我が侘で」
「良いんだよ、偶にはこっちに手紙を寄越しておくれよ」
「はい、かならず」
ピナコだけが、シンジとエンヴィーを見送りに来ていた。
「でも、良いのかい？他のみんなには話さないで」
「いいんです。これ以上は……行って来ます」
「行ってらっしゃい」
シンジ達を乗せた汽車が中央セントラルに向けて出発した。

中央軍部試験会場

「と、言う訳でサバイバル戦闘試験を始める。ルールは、最後の一人になるまで戦う事、以上」
あっさりとした説明、大總統の言葉にぼかんとするシンジ他60名。
だが、すぐに戦闘準備をしている。
シンジは、右目に付いている眼帯を外してポケットに入れる。
「始め！」
パン！バシイ！！カキイイイン！！

「……あっさり終わらせやがった、シンジの奴。(マジ?)
シンジが、錬金術を使って、一気に他の錬金術師全員を氷付けにし
たのだ。」

その時、右目は髪の毛に隠れていたが、赤色だった。

それを遠目で見ていた、エンヴィーは

「ヒュ〜 シンジってば、やる〜」

と、弟を見るような優しい目で褒めていた。

「うむ、見事な錬金術だ。彼から聞いていたが、これほどとはな」

「……お褒めの言葉ありがとうございます、キング・ブラッドレ
イ大總統閣下」

「……絶対に7歳には見えない(汗 つつか、礼儀正しく接
する7歳児なんて。」

「うむ、合格だ。それと、国家錬金術師には二つ名を貰う事になっ
ているが」

「……大總統のお許しが有れば」

「うむ、なら、『開眼の錬金術師』と名乗るが良い」

「はっ、それから、一つお願いが」

思わぬシンジのお願いに耳を傾ける大總統。

「何かね」

「俺が、国家錬金術師になったって言うのは、絶対に世間には知ら
させないでください、たかが7歳児の少年が国家錬金術師の試験に
合格したなんて、知られたら、大パニックに陥りますよ」

「……ふむ、確かに。この事は、上層部の秘密裏にしまって置こ
う」

「感謝します」

そう言っつて、シンジはピシッと敬礼をしてエンヴィーの所へ戻っつ
ていった。

ご丁寧に他の錬金術師達を元に戻して。

翌日、シンジのポケットには鎖で繋がれた六芒星の銀時計があった。

その月から2年が経ち、ネルフ国一掃戦が、開始される。

第六話 シンジの過去（後書き）

ネルフ国は、クセルクセス遺跡の更に遠い南側に位置する、大きな国です。

まあ、規模は大きさで言うとカナダの半分くらい。

その国には、一人の王と一人の王妃と十人の王子と十人の姫様が居ます。

王と王妃は、次の世代をその十人の王子と十人の姫様から、一人ずつ選ぶ事で、国を支えていくのです。

国民は全員、軍の訓練を受けていて、いつでも戦場に出て戦えるようにされています。

いわば、国民兵ですね。

で、ここには、エヴァキャラ達も出ます。

第七話 到着セントラル

シンジ達一行は中央軍部に向かう為、中央行きセントラルの汽車に乗っている。それに今回は予告も無しにロイの妹、リサが、この汽車に同乗している。(なんでやねん)

「・・・何でリサがここにいる訳？」

「は、話せば長い事ながら」

「・・・言わなくて良い。どうせ、馬鹿作者のなりいきなんだろう」
(正解です)

「馬鹿作者って、何なんだ？シンジ兄さん」

「気にするな、ただの電波だ」

(電波！？)

のらりくらりとキツパリ言うシンジに少々唾然となるエドとアル。メリッサとリサは、通路の反対側の椅子に座っている。

「ともかく、一度中央軍部に行って、情報を洗い直すしかないな」

「そうだな」

「ですね」

何事もなく、列車はセントラル駅についた。

「早く降りようぜ！！」

「もう兄さんってば」

「エドらしくて良いんじゃない？」

「全くエドってば」

「早くしないと置いてかれちゃうわよ」

そして、

「来たぜ！！セントラル！！」

駅の出口でエドがそう叫んだ。

すると、

「シンジ！久しぶり〜！！」

そこには、エンヴィーと他数人の軍人が居た。

「エンヴィー、久しぶりだな。」

「おいおい！俺達に挨拶はないのかよ、シンジ」

人懐っこい笑顔に黒縁メガネを掛けた無精髭の軍人。

マース・ヒューズ中佐が愚痴った。

「すまんすまん、かれこれ7年ぶりだな、ヒューズ」

「おう！それからよう、娘がもう一人増えたんだぜ、もうとっても可愛いなのって」

また、親バカ話を開始する前にシンジがストップを掛けた。

「はいはい、のろけ話は別な所でやってくれ」

「つれないね〜」

それを聞くと、その後ろの

「ぬおおおおお！！シンジ・イカリ殿！！お久しゅう御座いますううう！！」

と、皆さんもご存じのアレックス・ルイ・アームストロング少佐が、シンジにハグをした。

「ああああ！！シンジ兄さん！！！！」

「あわわわ！シンジお兄ちゃんの骨が折れちゃうよ！！」

と、なにげに酷い事を言うエルリック兄弟。

だが、

「はいはい、アレックス、いい加減離せ」

「ぬう〜、我が輩とした事が」

と、シンジを解放させた。

シンジは腕を組んで、

「シンジ・イカリ、国軍『大将』開眼の錬金術師、今帰還した」

「『はっ！』『はっ！』『はっ！』『はっ！』」

帰還した事を言った。

エド達は、ビキッと固まっている。

「……………え」と、シンジお兄ちゃん？
「ん？」

アルが恐る恐る聞いてくる。

「今、はつきりと国軍『大将』って、言った？」

「ああ、言っただぜ。それが？」

アルの疑問にキツパリというシンジ。

そして、

「……………ええ……………!!」「……………」

エド達が、大きな声で叫んだ。

(ま、予想はしていたけどな)

シンジはちゃっかり、耳栓をして彼らの大声から耳を守っていたのだ。

第七話 到着セントラル（後書き）

やってしまいました。

本当は、迷走の輪舞曲ロンドをもくっつけようと思いましたが、全てのストーリーが覚えきれいでいなかったので、止めました。

ああ、次、シンジとエドとアルの組み手を出そうと思います。

第八話 鋼対焰対開眼

「……そういやあ、近頃東方司令部で『鋼』と『焰』と『開眼』で誰が一番強いかっていう話で盛り上がりつつあるみたいだぞ?」

中央司令部、シンジの執務室にヒューズが彼らに向かって言った。

(尤も、シンジは書類の整理で聞いちゃいなかったが)

それを手前の席で聞いていたエド達はきよとした顔をする。

「んだよ。またそんな噂が広まっているのか?」

「よし、終了つと。で?何がまたなんだ?」

書類整理を終わらせたシンジが聞いてきた。

「あ、そっか、お兄ちゃんは知らなかったんだっけ?前、兄さんと大佐とで対決したんだよ」

「ふ〜ん、俺が居ない間にそんな事があつたんだな……で、結果は言うまでもなくマスタングの勝ちなんだろう?」

「……おう」

不満タラタラのエドがそっぽを向いて肯定した。

その行動にシンジは苦笑した。

「それで、ロイや東方司令部の面々が残業をしながら、後片付けをしたんだってよ」

「あれから、残業する日が増えたんだな……可哀相に(特に東方司令部の面々)」

机に頬杖を付きながら溜息をつくシンジ。

(ちなみにシンジは私服姿ではなく、軍服姿である)

それに同意するようにリサにアルも溜息をつく。

メリッサは、乾いた笑いをする。

「でも、本当に誰が一番強いのでしょうかね」

「実際に兄さんが本気で戦った所なんて見た事ないし」

「かといって、シンジ兄さんがマジで戦う処なんて見てねえし」

「僕もシンジお兄ちゃんの実力なんて見た事ないよ」

「……」

「ま、皆知りたいってことで…、安心しろ、皆の衆。すでに手を打つてある！」

「……？」

ヒューズの自慢げな物言いにエドとアルとメリッサとリサが首を傾げる。

シンジは、サーツと顔を青くして、

「ヒュ、ヒューズ？ま、まさか」

「察しがいいなあシンジ。そう、そのまさかだ！！」

少し黒い笑みを浮かべるヒューズを見て、心底泣きたいと思っているシンジ。

「レディース アーンド ジェントルメン！！！！それでは第2回軍部祭りを始めるぜ！！」

さっさと場所が変わり、中央司令部の練兵場にヒューズの声と歓声が響きわたった。

その大勢のギャラリーの中心にマイクを持ったヒューズが立っていた。

「ちなみに今日来てくれた皆の衆にオレからのささやかなプレゼントだ！！」

言葉を切ったヒューズは大量の紙をギャラリーに向かって投げた。よく見るとそれはヒューズの愛娘エリシアの写真だった。

しかも、いろんなヴァージョンがある。

当然、一気に周りからブーイングの嵐が巻き起こった。

しかし、そんな声にも留めず、話を進める。

「それでは、今回の対戦カード！ 赤コーナー、『焔の錬金術師』
ロイ・マスタングー！」

青コーナー、『鋼の錬金術師』エドワード・エルリック！！

そして最後に緑コーナー、『開眼の錬金術師』シンジ・イカリ！！
！」

ヒューズがリングアウンスよろしく、それぞれの名を叫んだ。

その時のギャラリーの反応は様々だった。

ロイに対しては「女たらし」「滅べ」「俺の彼女返せ！」などと蔑
まれ、エドに対しては「ちっせえ！」「小学生か？」「頑張れ、豆
粒！」などと変な声援にエドが「小さいって言っつてんじゃねー！！
！」とキレた。

しかし、シンジのは、「格好いい！！」「愛してます！！」「頑張
ってください、シンジ様！！」等々熱烈な歓声に少々、ゲッソリと
なるシンジ。

「何でこうなるんだ？」

やっぱりいつもの私服姿に身を包んで、腕を組んでいるシンジ。（

左右の腰には刀が一本ずつ差さっています）

「仕方がなからう、ヒューズが全て根回ししたんだから」

そう言っつて、暗い表情になるロイ。

「中佐つて、いろんな意味ででたらめだよな、俺達国家錬金術師と
違っつて」

その言葉に沈黙を通すシンジとロイ。

いろいろな意味があつて黙っているのだろうが、何か触れてはいけ
ない事があつたのか、重苦しい沈黙が漂う。

「今回の対戦方法は、剣術勝負だ！！」

「「は！？」「」

（そう来たか）

ヒューズの突拍子もない言葉にエドとロイは間抜けな声を出す。

シンジは、ニヤツと笑う。

そんな3人を無視し、説明を続けるヒューズ。

「ルールを説明しよう。対戦方法は至って簡単！！愛用の刀や軍支給の剣やサーベルを使って相手を降参させるなり、戦闘不能にさせるなりすれば勝ちだ！！ちなみに今回は錬金術は使用不可だ！！」
「何だとー！ー！ー！！」

「文句言うな！大總統閣下のお決めになったことだ！！最後に生き残った方が勝者だ！！更に言えば、錬金術を使った時点で其奴の負けは決定に後で全員にたこ殴りにあつて貰う！！そして、今回は特別に勝利を獲得した者には大總統閣下にどんな願いもかなえてやるとお達しを承ったぜ、イエア！！！」

その太っ腹な大總統のお言葉に周りから歓声が巻き起こった。

傍観者のリサとメリッサは「そんな軽はずみに言っているのかしら？」と大總統に対して首をかしげていた。

よもやこんな事になるとは思ってたシンジは、汗を垂らして苦笑した。

ロイとエドは、軍支給のサーベルをシンジは自分の刀を鞘から抜く。シンジの表情は、かなり真剣になっていた。

「・・・大佐、今回は一つ協力しないか？」

「何？お前から私に協力を要請するとは以外だな鋼の」

「正直言つて、シンジ兄さんの実力は分からねえ、けど、中途半端に戦つて勝てる相手じゃない」

「・・・確かに、良いだろう」

二人は協力してシンジを倒そうとしている。

「・・・ふん、俺を倒そうとしているのか。その心意気はよしとするか」

エドとロイもサーベルを構える。

シンジは、自然体で立つ。

構えはなし。

ヒューズは「面白くなってきたな」と満足げに笑った。

「それでは！！Ready go！！」

バツ！！

ヒューズのかけ声と共にエドとロイが左右に散って、シンジに近づく。

シンジは、動かずに自然体で立っている。

『動かざること山の如し』

武田信玄の旗、風林火山の山その物だ。

エドがまず攻撃を仕掛けてきた。

「うらああああ!!」

シンジの左側からサーベルを薙ぎ払いながら斬りかかる。

が、やはり、刀を扱うシンジは冷静に対処し左の刀だけで対処する。

ガキン!!

その後に右側からロイが攻撃してくる。

「貰った!!」

「甘い!!」

振り下ろされたサーベルを、今度は右の刀で対処する。

エドとロイは、攻撃を繰り返すも防御されたり、交わされたりして、かなり焦っていた。

それを見て、シンジが一言。

「お前ら、協力するのは良いが、全然駄目だな」

そう言っつて、隙の付いた所にシンジが蹴る。

「がはっ!!」

「ぐおっ!!」

二メートルぐらいは、吹っ飛んだであろう、エドとロイは腹を押さえて、立ち上がる。

フラフラになった二人を見て言う。

「速き事風の如く、侵略すること火の如く、今度はこっちの攻撃だ。受け止められるか？」

そう言っつた後、シュンツと近付いて、連続攻撃をする。

「ぐ!!くっ!!」

「ぐがっ!!がはっ!!」

すると、連続攻撃のせいにか、サーベルが碎け散った。

そして、

「これで止めだー!!」

空中回し蹴りで、ロイの首をゴギャツ!!と、もの凄く嫌な音を響かせ、踵落としてエドを気絶させ終了した。

「フツ、俺の前に立ちほだかる物は殲滅あるのみ」

そう決め台詞を言い、刀を鞘に戻す。
すると、

「はっはっは!!流石は開眼の錬金術師、見事な戦いだった。」

「大総統?いつから見ていらっしやったのですか?」

「つい先程から、さて、勝者のシンジ。君の願いを聞かせて貰おう」
そう切り出した大総統に少し緊張が走る。

そして、自然と周りのギャラリーの視線がシンジへと集まる。

「うーん、これと言って願いはないんだがなあ。ブリッグズ山に行く為に紹介状を作ってくれませんか?」

「ブリッグズ山にか?」

「ええ、戦友に会いに行くんです」

と、その顔は妙に爽やかだった。

「ふむ、良いだろう」

そう言っつて、その場を後にした。

そして、シンジが一言。

「本当に前触れもなく現れるなあ」

第八話 鋼対焔対開眼（後書き）

すいませんでしたー！ー！！（スライディング土下座）
戦闘シーンはもの凄く難しいツス。

文字で現す事って、かなり厳しいんですね。

どうしよう、このままブリッグズ山に行かせようか？

いや、一度ウィンリィ達の所へ行かせよう。

第九話 ブリッグズの北壁

「ぶえええつくしよい!!」

「うわ汚ッ!!」

「エド、くしゃみするんだったら口を押さえるよ」

シンジ達三人は、荷台に乗せて貰ってブリッグズ付近へと向かおうとしていた。

「うううう、寒い」

「でも、いきなりどうしてブリッグズへ行こうと思ったんですか？アルが、どうしてここへ来るのか聞き出す。

「ん？ん、まあ、言うなれば勘、かな？」

ちなみにメリッサとリサはリゼンブルでお留守番をして貰っている。

そのとき、かなり涙目になっていた事を追記する。

「兄ちゃん達、ついたよ」

案内しているおじさんが止めてシンジ達をその場に下ろした。傍には柵があった。

「ここらで良いかい？」

「ええ、十分です。ありがとう御座いました」

そう言って、三人は柵の中へ行こうとしていた。

「ああ、ちよつとそこの大きい君」

「え？僕ですか？」

突然さっきのおじさんに呼び止められたアル。

「それ、オートメイル機械鎧かい？」

「いえ、ただの鎧です」

「あつ俺、右腕がオートメイル機械鎧だけど」

それを聞いて、

「そうかい、だったら早く行きな、死ぬよ」

と、キツパリ言ったおじさん。

「……………はい？」

「そっち、軍の所有地だから、それじゃあ
そう言っつて、荷台を動かすおじさん。」

「……………はい？」

全くわけわからんな状態のエドとアル。

(あれ？何か忘れてるような
考え込むシンジ。)

まあ、兎も角、軍の所有地の柵の中へと入っていった。

まあ、入っていったのは、良かったんだけど。

ゴオオオオオオオオオオオ!

「うぎゃあああああー！ー！ー！ー！」

雪山に入ってから1時間、猛吹雪になりました。

「山の天気は変わりやすいって言ってたけどおおー！ー！」

「これは変わりすぎだろおおー！ー！ー！ー！」

「そんなに叫ぶと喉が渴くぞ」

体を固めて歩き続けるエドとフンドシ（笑）を押さえながら歩くアルに冬用の黒いロングコートを着て平然と歩くシンジ。

へんな三人組だな

（ゴシヤツ！！）

アゲツ！！

（今ここで消してやるよ（パンツ！バシイ！！）：シ）

ちよ！チエチエチエ、チエーンソーだけは！！

（シユイイイイイン！！）

あぎゃあああああああ．．．．．（チーン）．．．．．

．．．．．

（また遊んでしまった。不覚）（爆）

「そう言えば、エド達の師匠せんせいって、ここで一ヶ月放り込まれて修行したんだって？」

シンジがふと思いついたように言う。

「そつでー！ーす！ー！」

「そう言えば！！ここでクマも倒したって言ってたよな！！」

「無理！！絶対無理！！ここで一ヶ月保ってクマを倒すなんて無理！！！」

そしたら、目の前に黒い影が現れた。

「くまー！ー！ー！ー！ー！」

その現れた物体に目をやって叫び声を上げるエドとアル。

「．．．．．あつ」

ふと思い出したシンジが、戦闘隊形を取る。

エドとアルも攻撃態勢を取る。

そして、影の全貌が露わになったときシンジ達は絶句した。

「なっ……」

「うっそお〜」

そうすると、右腕がチェーンソー型の機械鎧オートメイルを振り下ろすクマのような男。

シンジ達は前転又はバックステップで交わす。

「なっ、クマじゃない!？」

「むしろ軍人だ!」

すると、彼が捕獲用ネットをアルに撃ってきた。

それに捕まるアル。

「うわっ!!!」

「「アルツ!!」」

そこへ、彼の機械鎧が来る。

エドは腕から甲剣をシンジは雪から氷の刀を錬成し回避する。

彼は、エドの機械鎧オートメイルを見て、

「なんだ、ナマクラ機械鎧オートメイルを使っているのか、訳もないなドラクマの密偵よ」

と言った。

それに慌てるシンジとエド。

「なっ!ちよつと待ってくれ!!俺達は怪しい者じゃない!!」

「大体人の話を聞け!!」

「ふん!ドラクマの者に耳を貸す必要はないわ!!」

と言って、襲いかかる。

シンジとエドも反撃する。

が、

ピシッ

(え?)

エドが反撃できなくなる。

シンジは彼と戦っている。

(なんだ？この痛み、動かねえ)

エドは肩の痛みが悪戦苦闘する。

すると、シンジと戦っていた彼がエドの右腕を捕らえた。

「ナマクラ機械鎧オートメイル取ったりいい!!」

「ぶわっ!!」

「エド!!」

すると彼は、何かを引いた。

そして、

ギギギッ

「・・・え?」

ギユイイイイイイイン!!

「うっそー!ー!ー!ー!!」

エドの右腕が切り取られようとしている。

「つく、アル!頭借りるよ!!」

「ええ!?!」

「エド!!これを使え!!」

シンジがアルの兜をヒツ掴んでエドに投げ渡す。

「ありがと!!」

そう言つて、アルの兜の白い部分の奴をチェーンソーに絡めさせる。

「ヌッ!!」

そして、エドは機械鎧オートメイルをチェーンソーから離しシンジ達の所へ。

「ぶええー!ー!ー!!」

「良かった、大丈夫か?」

「何とか、くっそおお、雪山で殺される前にウィンリィに殺される

つての」

キズ穴がついた機械鎧オートメイルを見てそうぼやくエド。

アルは既にネットから抜け出して、構えている。

シンジは、上段に氷の刀を構える。

目の前の彼は、

「良くここまで戦ったな、だが、お前達の負けだ」

そう言った後に、吹雪が止む。

すると、

ガシャッ

「・・・振り向く気力すらないんだが」

「・・・今回やたらと拳銃突きつけられる回数増えてねえ？」

そう言つて、両手を上げるシンジ達。

「ブリッグズの精鋭部隊か」

肩を竦めるシンジ。

すると、頭上から

「何があつた、バツカニア」

その声に直立姿勢を取るバツカニアとよばれる男。

「はっ、お騒がせして申し訳ありません、アームストロング少将！」

その言葉に見上げるシンジ達。

(あれが、オリヴィエ・ミラ・アームストロング少将)

(少佐の姉ちゃん・・・)

(・・・前会つた時より、綺麗になっているような)

「・・・銃を下ろせ」

「っは」

オリヴィエの言葉に従い、銃を下ろすブリッグズの精鋭部隊。

それを見て、両手を下ろすシンジ達。

そして、

「言つておくが、ここは弱肉強食の世界だ。舐めていると、痛い目を見るぞ」

目の前には巨大な建造物があつた。

それに啞然とするエドとアル。

(・・・久しぶりに見たな)

第九話 ブリッグズの北壁（後書き）

シンジとオリヴィエは戦友です。
それしか言いようがないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3698c/>

鋼の錬金術師～三人の天才～

2010年10月9日10時39分発行